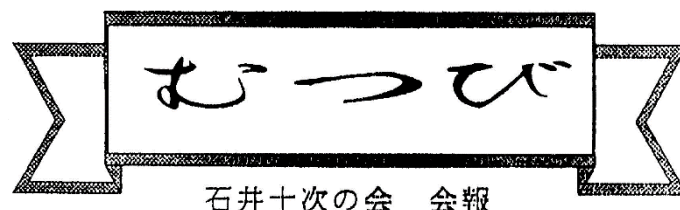


2025年
(令和7年)
4月10日



331号

児嶋琥一郎初代理事長に倣う地域づくり

都農町長 坂田 広亮

会報「むつび」の原稿依頼をいただき、「石井記念友愛社」について学びなおす機会と捉え、お引き受け致しました。

昨年8月、石井十次先生の没後110年、児嶋琥一郎先生の生誕110年を記念し行われた「第24回石井十次セミナー」に参加させていただき、「日本型の児童の自立支援・教育を求めて」と題したそのセミナーにおいて、石井記念友愛社の初代理事長である児嶋琥一郎先生のご功績を学ぶことができました。

児童福祉の父 石井十次先生は、大正3年、志半ばにして倒れられました。その後、大正15年、資金や後継者問題で岡山孤児院は解散、茶臼原校も閉鎖しましたが、第二次世界大戦の終結後、十次先生教育理念を戦後の社会状況に合わせて再構成し、「石井記念友愛社」を誕生させたのが孫の琥一郎先生です。

琥一郎先生は「子どもの人格の確立と経済的・社会的に自立した生活の形成には子ども自身の生活はもちろん、外の社会が生きるに足る社会でなければ、子どもたちの幸せな人生は築くことはできない」と考え、個人や家庭の福祉ニーズを、それぞれの生活状況だけでなく、地元地域社会の経済や社会関係の状況の中から把握し、そこに住む人々とのネットワークを形成、地域の生活改善に取り組みられました。この地域社会の現状や課題を把握するために、昭和33年から34年度にかけて、茶臼原開拓地の生活・営農実態調査を行い、生活や栄養・保健に関する調査の分析から茶臼原開拓地の特徴や問題点を洗い出しておられます。この時代に生活・営農実態調査からその地域の生活状況の分析を行ったことは非常に驚嘆すべき取り組みであり、この分析結果がその後の地域づくり成功の大きな要因になったと考えられています。

例えば、茶臼原地域での保育園開設も地域住民の生活ニーズを分析した結果、乳幼児の保育はもちろん、乳幼児を持つ家庭の生活を成り立たせるために必要

な施設であり、地域の人たちからの保育園開設の要望があったからです。

また、昭和 35 年 2 月に誕生した「二本松母の家」は茶臼原開拓地調査で指摘された営農面・生活面での課題に対応するような設備が備えられ、地域の人々の食事（栄養）や衛生の質の向上に役立ちました。また、地域住民の集まりの場としても活用され、地域住民が調査の内容や分析結果を自分自身の生活の問題と重ね合わせて捉え、課題解決を目指す活動が行われるようになり、課題解決に向けて協働する地域づくりが実践されました。

この他、虬一郎先生は多大なる功績を残されています。

セミナーでは、講師の田代英美氏が以下のようにまとめられている。

児嶋虬一郎初代理事長時代の友愛社は、民間社会事業を行う組織としての矜持を持って、子どもの人格確立と自立的生活を目標とし、それを可能とする地域社会・人が生きるに足る地域社会の形成に力を尽くしてきた。友愛社はこの理念を原動力としてさまざまな地域づくり事業に参加し、情報センター・交流センターという機能を果たして、活動を担う人々の協働ネットワークを繋いできたのである。この理念と目標実現への努力の先に、児嶋草次郎現理事長の“地域の社会資源としての社会福祉施設”という発想、『友愛の地域社会づくり』という友愛社の到達目標が見えてくるように思われる。

※引用 田代英美氏夏季セミナー資料のまとめから

このような虬一郎先生が取り組んだ地域づくりは現代の「自助」、「互助」、「公助」の「ささえあい」に通ずるものがあり、時代は違えど、今の私たちが取り組む「まちづくり」の大きなヒントになっていると考えます。「まちづくり」は行政だけで担えるものではありません。さまざまな人が集まり会話し、わが事・丸ごとの精神で解決策を講じ、現場での活動の担い手となり、更なる活動の輪を広げていくことで地域共生社会が実現できると考えています。

十次先生の教育理念を継承された虬一郎先生のように私も偉大な先人たちの想いを継承し、町政運営に邁進していく決意を新たにしましたところです。

「石井十次の会 都城支部 青年部」の発足

石井十次の会 都城支部 副支部長 松元祐一郎

この度、「むつび」への寄稿にあたりましては、都城支部青年部発足の経緯と活動を改めて説明させていただく機会だと考えて、お受けした次第です。

まず、私自身の背景としては、都城の高校を卒業後 12 年は県外で過ごし 21 年前に都城に戻って参りました。仕事のご縁で新森副会長主催の都城街づくり協議会を主とする会に参加していました。2022 年新森副会長より石井十次の会 都城支部青年部の発足にあたり、青年部部長の任の打診があり拝命いたしました。

しかしそれまでの人生において、社会福祉活動に全く関わり無く生きてきており、土地柄なのか、学生時代においても道德の授業はありましたが、社会福祉という概念を特に教育の中で受けた記憶もありませんでした。ちなみに当時の道德の授業は道德の本を黙読するか、たまに音読する程度だったと記憶しています。その様な環境でしたので、当初は石井十次先生に関する知識も全くないと言ってもいいくらいで、正直どうしたものかと途方に暮れました。

その様な状況でしたが、石井十次の会に参加し、石井十次先生の数々の教えや精神を勉強していくなかで、児嶋草次郎先生にも直接お話していただける機会を幾度も設けていただき、有隣園の宮城園長をはじめ職員の皆様、子供たちとも交流を進めていくにつれ、都城のこの地域で何をどうすべきかの方向性が僅かながらも見えてきました。

まず、一つ目は都城・北諸県において石井十次先生の教えや精神をもっと広く知ってもらう事です。さまざまな立場の皆様に社会福祉について改めて考えていただく機会の創出です。

そのために 2023 年 11 月 28、29 日に都城市立図書館前のまちなか広場「Mallmall」にて第一回目「児童福祉の父 石井十次展」を開催いたしました。石井記念友愛社から貴重な資料を多数貸し出ししていただき展示を行い、また映画「石井のお父さんありがとう」の上映も行いました。青年部だけでなく都城支部のメンバー、有隣園の職員の方々の協力をもらい何とか開催できた次第です。

第二回目、三回目は都城市役所市民サロンにて 2024 年 1 月 22 日から 2 月 2 日と同年 8 月 6 日から 15 日に開催いたしました。市役所の市民サロンでの実施でもあり非常に多くの皆様に見ていただく事ができました。市役所での開催を引き続き行うことでより一層、地域に根差した展示会にしていくという目標にもなりました。

直近の 3 月 13 日から 26 日には三股町立図書館内で第四回目の展示会を開催しました。展示物の再製作や紙芝居を見やすく取りまとめ、改善が図られました。

二つ目は、有隣園の子供たちや職員の皆様と一緒に、園の催し物や地域のイベント等を通じて「生きた交流」をより一層行い、相互理解を深め社会福祉・児童福祉の発展に繋げていくことです。

私自身、有隣園のクリスマス会、卒園生を送る会や交流レクリエーションのパークゴルフ等に参加していく中で、自身のイメージや固定観念が覆されました。子供たちに寄り添うだけでなく、一緒に行動することでより一層の理解が生まれるのだと実感しています。

また、都城市とモンゴル国ウランバートル市は姉妹都市であることから、都城モンゴル友好協会主催のモンゴル祭りが 2023 年 12 月 17 日に開催されましたが、国際交流の一環として有隣園の子供たちによるモンゴルの紙芝居「馬頭琴の伝説」の読み聞かせなど、多くの人達との交流が出来ました。

以上の様に、機会の創出・生きた交流を継続していく中で、この都城に石井十次先生の教えや精神を、また金銭に余裕がある人は金銭を、時間に余裕がある人は時間を、その両方が無くても活動する人たちを応援してくれる地域であるような社会福祉の基盤となる意識の底上げが出来るよう活動していきたいと考えています。

最後に、いろいろと模索する中での活動ですが、石井十次の会の皆様のご指導ご協力の程、宜しくお願い致します。

石井辰子 — 十次の命を支え孤児院の終焉^{しゅうえん}を見届けた生涯 —

明治28年9月、石井品子が31歳の若さで幼い3人の娘を残して永眠しました。三女基和子は生後6ヶ月の乳飲み子でした。子供たちをどのように育てたらよいのか、十次は途方に暮れます。しかし子供の養育も孤児救済事業も待ったなしの現実として十次の目の前に迫^{せま}ってきます。十次は手探りででも、前を向いて進まなければなりません。喫^く緊の課題として、再婚を考えなければなりません。十次の支援者たちが最良の後継者として着目したのが、吉田辰子でした。

辰子は十次より1歳年上で、福岡県生まれ。関西大学の前身、関西法律学校の創始者である吉田一士^{よしだ かずし}の未亡人でした。夫が病死したあと、子供がなかったので、貧しい病人の友になろうと、家族の反対を押し切って同志社看護学校に入学します。十次が明治25年に同志社病院に入院したとき、辰子の熱心な仕事ぶりに着目し、孤児院の看護婦に招きました。迷った辰子の背中を押したのは、同志社看護学校の校長ドクター・ペリーでした。辰子は病気の孤児の看護と、年長女子に看護技術を教える役目を果たしてゆきます。



石井辰子

再婚話が持ち上がった時、辰子は太^{こん}太^{わく}困惑しました。辰子は吉田家を支える主婦なので、辰子がいないと吉田家は崩壊してしまいます。親族は大反対でした。迷う辰子の背中を押したのはまたドクター・ペリーでした。「長年の酷使のため十次の体は傷んでいる。十分な看護がないと命が尽きてしまうだろう。」辰子は決心し、周囲の反対を押し切って吉田家を去り、十次と結婚しました。3児の母として、孤児の母として、病気の孤児の看護婦として、さらに病身の夫を支える妻として、まさに獅子奮迅の日々がはじまりました。十次が48歳まで命を長らえたのは辰子のお陰でした。

大正3年、十次が亡くなると、評議員会で「孤児院は十次の人格^{まう}を以てしてはじめて可能。十次一代限りの事業」として「できるだけ早い整理」が決められました。しかし残された300人の孤児や100人を超える職員^{おおはたらけ}の行く末を決めるまでは続けることになりました。当面の孤児院長には大原孫三郎、次に大庭孟が就任。そのあと大正10年に辰子が推^{おし}されて院長に就任。大正15年、評議員会は孤児院を解散して清算に移しました。孤児院は終焉を迎えたのです。それを見届けた辰子によりやく休息の時が訪れます。2年後の昭和2年3月、辰子は波乱に富んだ生涯を閉じました。享年65。

十次の前例のない孤児救済事業は、裏で品子と辰子が支えていたのです。2人の存在なくして十次の偉業はなかったことを、私達は忘れてはなりません。

(編集委員 石川正樹)

《 お し ら せ 》

★ご寄付をいただきました(敬称略)

【宮崎市】 柘植 幹雄 【延岡市】 津野 和幸

*ここまでの掲載者は編集等の都合により3月20日までのものとしています。

★石井十次の会 総会 4月20日(日) 午前11時～ 石井記念友愛社 研修館

総会后、会員相互の交流会を軽食をしながら行います。お気軽にお越し下さい。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●坂田広亮様には、巻頭言に玉稿をいただき感謝いたします。昨夏の十次セミナーに出席され、初代理事長が取り組んだ地域づくりにヒントを得て、まちづくりを推進されています。その真摯な姿勢に心から敬意を表します。

編集委員 石川 正樹